

AL型授業への挑戦

この連載がスタートして1年が経ち、アクティブラーニング型授業(以下「AL型授業」)という言葉は教育現場にも浸透してきました。言葉だけでなく日常の授業で浸透させるには、個人で動くよりも学校組織で取り組むことが効率的であることは言うまでもありません。この連載では、学校をあげてAL型授業に取り組む高校をご紹介します。今回は入試改革とともにAL型授業を取り入れた中村中学・高校の事例をご紹介します。

企画協力/小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文/長島佳子



第6回 中村中学・高校(東京・私立)

School Data

1903年創立/全日制普通科・国際科/生徒数273人(女子)/進路状況(2015年度実績)大学・短大103人、専門学校7人、就職1人、その他12人

様々な個性が同じ教室で
ともに「学び合う」ことで
「教室から世界を変える」

「教室」を「社会」の環境に
近づけることからスタート

中村中学・高校は、中学1年次から学年ごとに丁寧なキャリア教育を実施していることで知られている中高貫の女子校だ。「学ぶ喜びに満ちた学園」を目指す校風としていたが、2010年に梅沢先生が校長に就任した際、これからの時代は単なる「学び」ではなく、「学び合い」が必要ではないかと考えたそう。

「せっかく個性豊かな力を持った生徒たちが教室にいるのに、一方通行の授業ではもったいない。生徒同士が学び合う授業にすれば、お互いが高め合えるのではないかと思ったのです」(梅沢先生)

当時はまだAL型授業という言葉がほとんど聞かれない頃だ。そこで校長は、進学や教務の担当教員たちと相談のうえ、取り組み方法は各教員に

任せ、少しずつ授業に「学び合い」の要素を取り入れるよう指示した。年に2回、教員同士がお互いの授業を参観する研究授業を行い、その時だけでも「学び合い」を試してみようということになった。

「自分にもまだ具体的なイメージがありませんでした。ただ、教室の中が社会とかけ離れていることが気になっていたのです。例えばチャイム。実社会にチャ



梅沢辰也前校長



教務センター センター長
ZERO.1チーム長
石井 律先生

イムはありませんから、まずチャイムを廃止し、教員と生徒に時間の自己管理を促しました。法政大学の尾木直樹先生のゼミに入った卒業生から、「オランダの学校もチャイムがないそうだと聞き、オランダの教育に関心を持つようになりました」(梅沢先生)

オランダで盛んなイェナプラン教育では、異学年の生徒が同じ教室で学び、上級生が下級生に教えることで教育

中村中学・高校の アクティブラーニング型授業への 取り組みの歩み

2010年 梅沢先生が校長に就任
学校の目標を「学ぶ喜びに満ちた学園」から「学び合う喜び」に

それぞれの教員が自分の授業の中で考える「学び合い」をゆるやかにスタート
※年に2回の「研究授業」でお互いの授業を公開

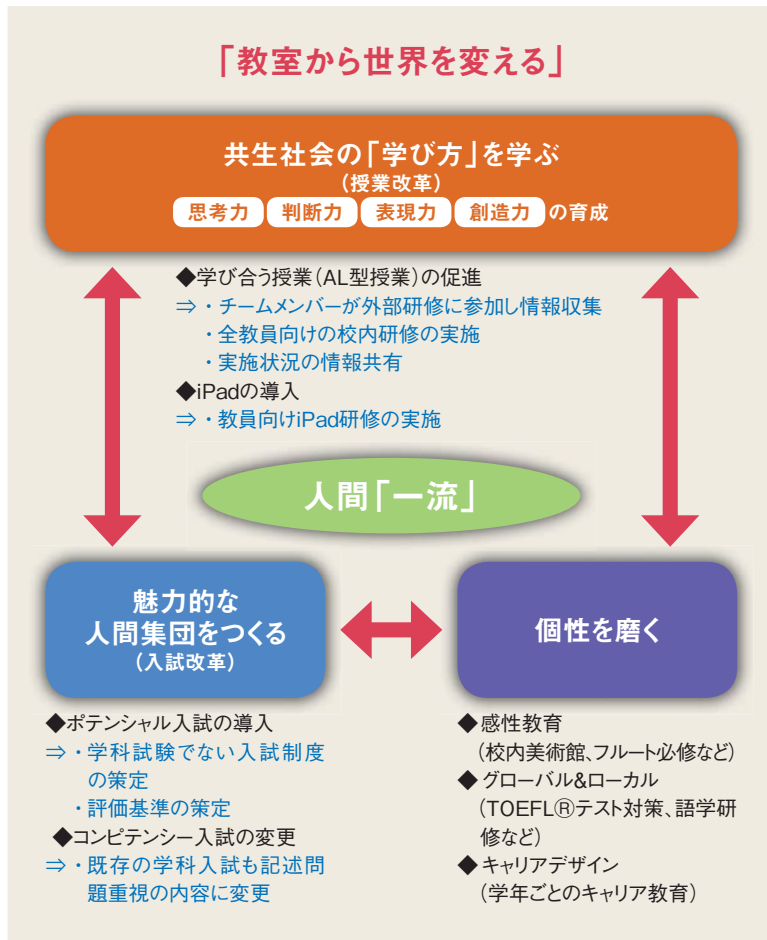
2014年末 中央教育審議会の答申で、入試改革やアクティブラーニング型授業について
明言化される

2015年3月 中村中学・高校でもそれまでの取り組みを時代に合わせてステージアップさせるため「ZERO.1」プロジェクトをスタート
・「ZERO.1」チーム発足
・授業改革として「学び合い」にAL型授業の導入を決定。ICTの導入も決定
・入試改革として「ポテンシャル入試」を導入

同年5月 小林昭文先生を招聘した全教員対象のAL型授業研修を実施

授業現場で各教員が自分なりのAL型授業を実施中

「ZERO.1」プロジェクトのミッションと取り組み(※青字がチームメンバーの動き)



「ZERO.1」チームの先生たち(取材時)



教務、大学受験、国際教育、情報科の各責任者と、国語・数学・英語の教科主任の先生で構成されるチーム。入試改革の時期は多忙を極めていたが、現在は週に1回会議を開いてAL授業の進展などについての報告会を行っている。

専門チームが入試改革と授業改革に本格的に着手

効果が高まることなどを知った。同じことはできなくても、異質な者同士の学び合いの効果に確信をもったそうだ。

それから、グループワークを取り入れるなどの個別授業での学び合いを進める一方で、文化人やスポーツ選手、学者など、外部の様々な人を呼んで全校的な講演会やワークショップを多数行ってきた。

個々の取り組みを全体で情報共有することが課題

一方、授業改革ではAL型授業を本格的に導入し、生徒全員にiPadを持たせることにした。

こうした取り組みが5年たった2014年末、中央教育審議会の答申で大学の入試改革やAL型授業が明言された。梅沢先生は今までのゆるやかな取り組みのステージを一段上げるときだと決意。「ゼロから一を生み出す」意味を込めて「ZERO:i」プロジェクトをスタートさせた。

プロジェクトは梅沢先生を含め8人のメンバーからなるZERO.1チームを核として進行。チームのミッションは「教室から世界を変える」というプロジェクトの目標の具現化だ。その柱が入試改革と授業改革だ(上図)。

入試改革では大学のAO入試のような「ポテンシャル入試」を導入。芸術・スポーツ・英語などの分野で高い能力を持つ生徒を、作文や面接で評定する。中高一貫校の同校の入試対象は小学6年生だ。この2月に受験した生徒には、鶴を折るギネス記録を持った生徒や、絶滅危惧種についての大学の論文を読んで紙芝居を作ってきた生徒もいたという。

「1年で入試と授業の両改革を進めるのは大変でした。AL型授業については外部の研修でお目にかかった産業能率大学の小林昭文先生をお呼びして、全教員対象の研修会を開催しました。小林先生が「普段の取り組みの中にもALの要素がある」とおっしゃり、我々もやる気になりました(石井先生)。

研修の依頼について小林先生はこう振り返る。

「研修の依頼は校長などトップの方からがほとんどですが、現場の先生発信でお声がかかるのは珍しいケースです。校長のリーダーシップだけでなく、コアチームの方々が熱心に研究されていることに感銘を受けました。また、入試の説明会でもAL型授業体験を実施したと聞き驚きました(小林先生)。

「ZERO:i」がスタートしてまだ1年。課題もまだまだある。

「入試改革と並行したため研究授業はやめました。その分、教員間の情報共有が減ってしまったので、チームとして個々の先生の取り組みを共有できるしくみを作っていきたいと思っています(石井先生)。

入試改革と授業改革による同校での化学反応に今後も期待したい。

教員24年
前岡克美先生



古典(2学年*)

1993年より中村中学・高校に着任。2008年よりキャリアアセンダー長としてキャリアデザインの授業も担当する。教員としてのモットーは「学び、考え、実践する」

生徒がイキイキと授業に参加し
予習の質や、複眼的な
思考が高まった

生徒が先生役になる授業で
参加する意欲をあげる

学校の方針で「学び合い」が決まって以降、前岡先生も担当の古典でグループワークを取り入れた授業を行っていた。

「2014年度までは担当していた1学年の4クラスのうち2クラスで、単語調べや品詞分解、全訳など個人で予習してきた内容をグループで共有して、3行ずつ発表させるなどしていました。みんな楽しそうだったので、2015年度からは全クラスで導入しました」

普段は前岡先生が授業を進行していたが、大学のゼミ発表のように「授

業そのものを生徒に進行させたらどうなるか」と思い立った。

「生徒たちに先生役をやらせてみようと思いました。うちの学年の課題は『質問力がない』ことで、授業以外の講演などでも質問をしないのです。本当に質問がないのか、恥ずかしいかなのか、生徒が先生になったら質問できるか試してみたかった理由もあります」

独自の工夫で授業を作り
多くの気づきを得た生徒たち

例えば『大鏡』を5段落に分け、5グループが1時限ずつ、担当の段落についての授業を受け持つ。どんな授業をするかは生徒たちの自由だ。

「実際にやらせてみたらグループワークを入れるタイミングや、問いの発し方など、私自身の発見が大きかった

す。『質問が出なければみんながわかったことにするよ』と伝えてあったので、質問も活発に出て、その内容が鋭かったのも驚きました」

先生役の生徒たちは質問されても困らないよう、入念な予習が必要となる。また、グループワークを挟んだり、紙芝居を作ったり、飽きさせないための工夫も凝らしていた。

「それまで知らなかった生徒の新たな面が見られただけでなく、振り返りシート(下記参照)を読んで、人の意見を知ることの大切さや、人に伝えることの楽しさを知ったなど、生徒の気づきの多さがうれしかったです」

当初はA1型授業だけでは情報量が減ると考えていた前岡先生だが、組み立て方次第で情報量を減らさずに、生徒がイキイキと参加できる授業も可能だと考えているようだ。

1学年時



役をさせると、授業中に寝ていた生徒もはりきって参加するようになったそうだ。

1学年のときは本文を全部板書して時間を使ってしまうグループもいた。



2学年時



2学年になるとポイントをおさえて板書するなど、先生役に生徒も慣れてきた。

古典の内容をわかりやすくするために、自作のイラストで紙芝居を作ったグループも。



グループワーク中は先生役の生徒は、グループの進行をチェックして回っていた。

生徒たちが授業を楽しそうに受けるだけでなく、古典への興味も深まったようだ。



生徒たちの「振り返りシート」から

- ◆ひとつの場面でも様々な解釈ができることがわかったので、自分ひとりでも物事をさまざまな面から見るようになると思うようになった。
- ◆自分は発表に恐ろしく不向きなことがわかった。緊張しないように原稿を作ったり、イメージトレーニングをしたけれど班長としてきちんと皆を引っ張り上げることができなかった。しかし、裏方の調べる作業は楽しく行うことができたので、私は裏で資料作りなどをこつこつとやるのが好きということに気づくことができた。
- ◆自分でもできるんだと思い少し自信が付いた。
- ◆自分が間違えたときに一緒に考えてくれる仲間の大切さを感じた。
- ◆その場をどうにかして乗り越えるという考えではなく、他人にとってどうかということを考え、発表することができた。

※取材時